

自己の発達と泣きべそ

榎 沢 良 彦

前回、私はある一つのエピソードを解釈して、「泣きべそ」の意味を提示してみました。今回は、泣きべそという表出行為を、自己の発達、あるいは自己の構造との関係で捉え直してみたい。

一、自己とは

まず始めに、一般的に用いられている「自己」ないし「自我」という概念が問題になる。ところが、この両概念は一般社会においてと同様、学問の世界においても、

明確に区別されてはいない。研究者によっては、両概念をその人なりに定義して用いようと苦心している人もいる。しかし多くの場合、研究者の好みや立場によってどちらかの用語が使われているというのが実状である。私も、両者をほぼ同義のものと考え、ここでは「自己」という言葉を用いようと思う。

心理学的に、自己とは、意識の流れを担い、意識諸体験を統一している主体のことと考えられる。意識の主体でありながら、意識と共にいつでも体験されてしまつて

いる自己を、心理学的な発達という観点で問題にする時、一方で、私たちは「自己の機能」を問題にすることができる。他方、私たちは「認識の対象としての自己」を問題にすることもできる。つまり、自分が自分自身をどう意識しているのかということの問題にするのである。一般的に、自己の成立とか自己の芽生えと言う場合、私たちは認識の対象としての自己を問題にしている。実際には、機能としての自己と対象としての自己とは、切っても切れない関係にあり、両者は相携えて発達していくのである。

二、自己の発達

既述したように、自己の発達は二側面から考えることができる。一つは、現実に対して能動的、積極的に適応していく自己の発達、つまり適応機能の発達であり、他の一つは、自己意識の発達である。

自己は、主体と他者や事物を含めた外界との間の交渉を通じて形成されていく。最近の乳幼児研究によると、

赤ん坊は生まれた時から外界の刺激を弁別すると言われている。その点で赤ん坊は外界を知覚する機能を持っており、主体的な存在であるとも言えるが、この時期には、未だ十分に主体としての自己意識を持っているとは言えない。

機能はある程度生得的に個体に具わっており、その機能を通して主体が外界と交渉する過程で、自己の意識が芽生えてくるのであり、自己意識が豊かになるに伴い、自己の適応機能も発達していく。このように、適応機能と自己意識とは、一体を成して発達していくのである。

三、自己の発達における泣き声

一般的に子どもの自己の発生前および発達は二つの時期を経て進むと考えられている。まず最初は生後三カ月頃までの時期で、これを「前共生期」と言う。第二の時期は、生後三ヶ月から生後二、三歳までの時期で、これを「共生期」と言う。

前共生期においては、子どもには未だ「自分」と「自

分でないもの」との区別がない。子どもは自分の置かれている環境の中に埋没し、それと融合した状態を生きている。また子どもは母親と他の大人とを明確に識別してもしない。この時期の子どもがどの大人に対しても愛想を振りまくのは、自己と環境とが融合していて区別されていないことによるのである。

共生期に入ってくると、子どもの認識が分化し、「自分」と「自分でないもの」との区別が徐々にできてくる。そして不特定の他者の中から、特定の人（母親）が子どもにとって意味を持つようになり、母子の間に強い愛着関係が形成されてくる。しかし最初の頃は子どもは母親を「他者」として明確に意識してはいない。子どもは母子融合状態を生きている。この時期の子どもにとっては、「母子の安定した共生関係」自体が自分の領域なのであり、広い意味での自己なのである。「八ヶ月不安」と呼ばれる人見知りの現象は、子どもに広い意味での自己の領域が生じてきたことを示している。

子どもは母親との共生関係を保ちながら、しだいに母

親を「他者」として認識するようになる。同時に、一個の独立した自分の意識、つまり自己意識が確立されてくる。その時期が生後三歳前後である。この頃現われる「分離不安」の現象は、子どもに狭い意味での自己が芽生えてきたことを示すものである。

自己が確立するにつれて、子どもは、それまで母親と共生し、これに依存していた状態から独立し、精神的に自立しようとするようになる。その現われが「第一次反抗」と言われる現象である。子どもは、現実世界の様々な障害や自己の葛藤等を、自分の力で克服できるようになってきたのである。このことは自己の機能の面から言えば、適応の機能が強化されてきたことでもある。

それでは、「泣きべそ」という表出行為は、この自己の発達過程においてどう位置づけられるのだろうか。

前記の前共生期においては、子どもの自己は未成立であると言える。子どもは自分の置かれている状況と一体となっているので、状況を理解した上で泣くということはない。ほとんど自分の生理的欲求や不快を訴えるた

めに子どもは泣く。当然ながら、この時期の子どもはほとんど無力な存在なので、生理的欲求を満たすためには、大声で泣く以外に方法がない。

共生期に入って、子どもが広い意味での自己の意識を持つようになるにつれて、子どもの泣き方は多様化してくると思われる。少なくとも、生理的レヴェルの泣きだけではなく、自分の存在感に基づく泣きも現われるようになる。例えば、不安に伴う泣きがそれである。

不安というのは、ハイデッガーが指摘しているように、本来的に人間の死に関連しているものである。つまり不安というのは、本来的に自分の存在の危機感の感情なのである。この時期の子どもが他者の接近によって泣いたり（八ヶ月不安）、母親との分離で泣くのは（分離不安）、子どもが自分の存在の危機を感じるからである。

この時期、子どもの自己は茫漠としたものであり、他者と十分明確に境界づけられた自己ではない。それは母親との一体感によって初めて成立するような自己であるため、外界での危機的事態は、直接的に子どもの自己の

存在を脅かしてくる。^(二)この場合、子どもは自己の存在の根源的基盤である母親に依存することによってのみ、その事態を乗りきるのである。

しだいに様々な能力が発達してきて、これまで出来なかったことも出来るようになる、子どもは有能感を持つようになる。自己についての認識も多面的になる。これらのことが自己意識の明確化と、現実への適応機能の強化を促す。

更に、子どもが言語を獲得するようになると、子どもは自分を客観化することができるようになる。ここにおいて、母子分離が促進され、母親は子どもにとって他者となり、子どもの中には個としての自己意識が芽生えてくる。この自己意識の確立は、子どもが自分の置かれた状況を客観的に見たり、その中に自分自身を位置づけたりすることができるようになってきたことを意味している。子どもは自分を客観化することによって、その状況の中で自分の取り得る行動の可能性を考えることができる。子どもは、母親依存一辺倒の時とは異なり、現実を

処理する多様な手段を講ずることができるのである。

泣くという行為も極めて多様化してき、その場の状況に応じて泣き方も変わってくる。野村は、五歳児になると、「くやし泣き」「こらえ泣き」等の自分の感情を抑制する泣き方や、「ウソ泣き」等の泣き方を子どもがするようになる^(二)と述べている。私が問題にしている「泣きべそ」は恐らく「こらえ泣き」に近いものだろう。

一方、機能の発達に裏打ちされた自己意識の確立は、子どもにも母親からの自立を求めさせる。黒丸は、この時期の分離不安を、母親から独立しようとする子どもの成長意欲と、なおも母親にしがみつこうとする依存意欲との間の葛藤の現われと捉えている。^(三)子どもは自立と依存という相反する欲求の境界に立つようになるのである。

一般に自己が確立すると言われる三歳以降になると、子どもは実に多様な泣き方をするようになる。その中の一つとして「泣きべそ」も挙げられる。しかし実際はもっと早い時期から「泣きべそ」は現われうる。

前回のエピソードの考察が示しているように「泣きべ

そ」は矛盾する気持の間の葛藤を表わすものと考えられるが、以上に述べてきた自己の発達に関連づけると、次のようになるだろう。「泣きべそ」は、現実の諸問題で自分で処理する力が具わってきて、母親から自立しようとする心が芽生えてきた子どもが、現実の危機的事態に直面した際、自立心と依存心との間で揺れているその心理状態を表わしていると言えるだろう。このような、自己が境界線上を彷徨う「泣きべそ」という行為は、少なくとも、広い意味での自己意識が芽生えないうちは、現われ得ないだろう。

以上、「泣きべそ」を自己の発達と関連づけて考えてみた。そもそも発達は個人差の大きいものであり、「泣きべそ」という行為もそれをよくする子もいれば、ほとんどすることなく幼児期を過ぎていく子もいるだろう。「泣きべそ」をかかないからと言って、その子の発達に問題があるというわけではない。私が言いたいことは、もしも子どもが「泣きべそ」をかくことがあるなら、そ

れは発達のには、以上のように意味づけられるのではないかとということである。

(東大・教育学研究科)

〔注〕

- (一) 例えば、自閉症児は、他者が不用意に近づくとパニックを起こすが、それは、彼の自己が未成立で、自己と他者との境界が極めて弱いことによると考えられる。山中康裕「早期幼児自閉症の分裂病論およびその治療への試み」笠原嘉 編『分裂病の精神病理5』東大出版会 一九七六、一四七—一九二頁 を参照。
- (二) 『子どもの発達と教育4』岩波書店 一九七九、一九七—一九九頁 野村庄吾 担当。
- (三) 黒丸正四郎「小児神経症の心的機制」『異常心理学講座4』みすず書房、一九六七、三九頁 参照。

〔参考文献〕

。『異常心理学講座4』みすず書房 一九六七。

。笠原嘉 編『分裂病の精神病理5』東大出版会 一九七六。

。『異常心理学講座8』みすず書房 一九六八。

。『子どもの発達と教育4』岩波書店 一九七九。

。柏木恵子『子どもの「自己」の発達』東大出版会 一九八三。

九八三。

。小林登『赤ちゃんの誕生』岩波書店 一九八四。

。M・ハイデッガー『存在と時間』勁草書房 一九六〇

(上) 一九六六(下)

。木村敏『自己、あいだ、時間』弘文堂 一九八一。

。ワロン『身体、自我、社会』ミネルヴァ書房 一九八三。

三。